自習室で長時間勉強しよう

－北京で考える－

開倫塾
塾長　林　明夫

Ｑ：北京には何をするために行ったのですか。

Ａ：(林。以下省略)強い使命に基づいた大学の経営をどのように行うかを話し合う国際会議に参加するためです。ＯＥＣＤ(経済開発協力機構)などの主催によるものです。

Ｑ：どこで開催されたのですか。

Ａ：北京と西安です。北京では、北京師範(しはん)大学が会場でした。そこは、北京にある先生を教育する大学です。第二次世界大戦前は日本にも「師範学校」がありました。北京に到着した日曜日の午後７時すぎに、美しいキャンパスを散歩していると、多くの教室に明かりがついているのを目にしました。何か特別な行事でもあるのかと思い、中をのぞいて驚きました。どの教室にも学生がたくさんいて、物音ひとつたてずに静かに勉強しているではありませんか。

中に入りなおも驚いていると、「隣の席が空いているからここで勉強できるよ。」と親切に教えてくれる学生までいました。

教科書や参考書、ノート、筆記用具、ペットボトルに入った水などだけを持ち込み、どの教室でもおしゃべりをする人は１人もなく、20　～　30　人の学生が頭も上げずに黙々と勉強に励んでいる姿に感動すら覚えました。(中には１～２名眠っている人もいましたが…。)

中国の底力を思い知らされました。これから先中国はすごい国になるなとも思いました。

Ｑ：使っていない教室を利用して自分で勉強するところは、開倫塾の自習室の使い方に似ていますね。

Ａ：はい。開倫塾でも、授業で使用しない教室をすべて自習室として無料で塾生の皆様に開放していますので、北京師範大学と同じですね。(ただし、日曜日は先生や事務職員の皆さんが出勤しない場合が多いので、お使いいただけないことが多いとは思いますが…。)

Ｑ：開倫塾では、なぜ授業で使用しない教室を自習室として塾生に無料で開放しているのですか。

Ａ：勉強には３　つの段階があると、開倫塾では考えます。

(１)第１は、「うんなるほど」と腑に落ちる・納得する・よく分かる「理解」の段階。この「理解」は、学校や開倫塾の授業などで可能となります。

(２)第２は、よく「理解」できたことを正確に身に付ける「定着」の段階。「定着」とは、①「理解した内容を何も見ないでスラスラ正確に言えるまでになること。」つまり「暗誦(あんしょう)」ですね。②「理解し暗誦できるようになったことを正確に楷書(かいしょ)で書けるまでになること。」つまり「暗記」ですね。③「例題として挙げられるような問題は、問題を見た瞬間に考えることなく条件反射で正解できること。」この三つが「定着」の内容です。

学校や開倫塾では授業時間が限られていますので、「理解」が中心となり、授業中だけではなかなか「定着」までできないことが多いようです。

「定着」のためには「膨大(ぼうだい)」な時間が必要です。ただ、一度は「うんなるほど」と「理解」しているのですから、忘れてしまわないうちに「定着」のための作業時間を確保さえすれば、誰でも、理解した内容を確実に身に付ける、つまり「定着」させることができます。そこで考え出されたのが開倫塾の自習室です。そして、「定着」できたかどうかを確認するのが「確認テスト」です。

(３)第三は、「理解」し「定着」させた内容を実際に活用する「応用」の段階です。この「応用」の内容は、①「テストで合格点以上の得点を取ることができる」ことと②「実際の生活で使いこなせる」ことです。開倫塾では授業でもテスト対策を行いますが、一度間違えた問題をやり直すことは自分でもできます。これをするのが自習室です。

Ｑ：最後に一言どうぞ。

Ａ：学生の仕事は「勉強」です。開倫塾にいる間に自習室の活用を含めて勉強の仕方を身に付けて下さい。北京師範大学の学生も、小学校、中学校、高校時代に自分で勉強する能力を身に付けたからこそ、日曜日の夜まで大学の教室で勉強することができるのです。

皆様も勉強方法を身に付け、自分の未来は自分で切り開きましょう。

― 2005 年 5 月 9 日、北京師範大学で記す―

北京と西安では、中国政府中央教育科学研究所、ＯＥＣＤ・ＩＭＨＥ(経済開発協力機構・高等教育管理)、北京吉林大学共催の「Mission, Money, Management」と題する高等教育に関する国際会議に参加いたしました。会議の内容は www.oecd.org/edu/higher で公開の予定です。